



宮城教育大学附属図書館ニュース



2006. 3. 10 発行



図書館に行こう!

◎図書館からのインフォメーション

- 新入生ガイダンス、資料の探し方講習会の案内…………… 2
 ホームページも活用しよう!「ホームページの紹介」…………… 3
 展示もやってるよ!「常設展示、展示コーナー」、本学教員等著作寄贈図書一覧…………… 4

◎図書館の展示企画

- 図書館企画展「歴史のなかの教科書～国語と修身～」の報告……………田 端 健 人 5
 「マザー・グース」と「子どもの遊び」と「昔話」と～オーピー夫妻の「仕事」を追って～…藤 田 博 7

◎学生の読書室～私が選ぶこの一冊～(第4回)…………… 8

◎新任教員からひとこと「私と図書館」

- 「図書カード」が語るもの……………井 柳 美 紀 11
 自然誌系博物館と図書館……………島 野 智 之 12
 現実との対話の機会が奪われた「私」と「図書館」との絆……………松 崎 丈 13
 変貌する大学図書館……………石 澤 公 明 14

◎研修・講習を受講して…………… 15

◎平成18年度開館カレンダー…………… 16

◎スプリング・エフェメラルに寄せて(表紙の解説)……………佐 藤 秀 二 6

図書館からのインフォメーション

新入生ガイダンス

新入生の皆さんのために、ガイダンスを行っています。
大学生としてこれから学習・研究を行うためには、上手に図書館を活用することがとても重要です。図書館のオンライン目録(OPAC)では、本学で利用できる約30万冊の図書、約5,800タイトルの雑誌を探することができます。



「この図書館には何があるの？」
「宮教大の図書館ってどんなところなの？」という疑問に、係員がやさしく・親切丁寧にご案内します。是非、図書館ツアーにご参加ください。新入生ガイダンスは、図書館ホームページやポスターなどでもお知らせしています。
今年は4月17日(月)～21日(金)です。お申し込みは図書館カウンターへ。

資料の探し方講習会

図書館ホームページには、各種データベースや電子ジャーナルなど、便利なツールがたくさんありますが、図書館では、文献やさまざまな情報を探すためのツールと、それらを扱うテクニックについて、講習会を開催しています。

「この資料はどこにあるの?」「論文って何を探せばいいの?」と思ったことはありませんか。資料や情報をムダなく、モレなく集めるには、探し方についての知識とコツが必要です。この講習会では、資料や情報の探し方について、パワーポイントを使っての講習と実習もまじえて説明します。

5月と11月の年2回、1週間ずつ行っています。ゼミの皆さんやお友達のグループで受講してみませんか?もちろん一人でもOKです。レポート・論文を作成する際に、きっと役に立つ講習会です。

また、定期の講習会のほかにも、皆さんのご希望に応じて随時開催しています。講習内容も、皆さんの希望の内容で行うことができます。

受講を希望される方は、詳しい内容等を図書館カウンターにお問い合わせ下さい。



講習会を受講して

学校教育専修 竹内 加奈子

研究室の先生に勧められて受講しました。これまでも資料は探したことがあったのですが、参加してよかったというのが正直な感想です。

一つ一つ段階を経て教えていただき、自由に質問もできるので参加者全員が内容をマスターできました。さらにいただいた資料もわかりやすいため、講習後自分で検索する際も大変参考になりました。学部生の時は限られた情報の中から文献を探していました。卒業論文を書く前から、多くの文献に触れていなかった、こういった機会をもっと利用しておきたかったと今になって思います。

何よりこの講習会では、職員さんと交流ができるため、講習後検索に限らず図書館利用等について質問しやすくなります。より図書館が身近になるのでとてもお勧めです。

※「ガイダンス」&「講習会」の問い合わせ先

情報サービス係 Tel:022-214-3350 E-mail:unyo@staff.miyakyo-u.ac.jp

図書館からのインフォメーション

展示もやってるよ!

常設展示について

宮城教育大学附属図書館には、普段は古典古書室などに収納され、直接目に触れる機会が少ない貴重な資料も沢山所蔵しています。それらを広く学生、教職員あるいは学外に公開していきたいと考えてます。先頃、教科書の企画展を開催し、沢山の入場者を得ましたが、このような特別企画の展示とは別に、常設展示として常に図書館で何かを展示していることを目指していきたいと思ひます。

図書館2階の第二展示場において、第1回目は、横須賀学長が図書館ニュースに92号に御執筆くださった「仙台童蒙新聞」を常設展示として展示しました。この新聞は、明治10年発行の第1号で、その後何号まで刊行されたのか、また今のところ他に所蔵されているかどうか不明の幻の新聞で、まさに本学図書館の「お宝」です。

このあとの企画として3月末日まで、平成11年度に図書館で大型コレクションとして購入した「イギリス児童書コレクション」を紹介しています。英語教育の藤田先生に、御協力いただいて3回にわたるレクチャーもあり、大変充実した内容となりました。

この展示内容は、図書館のホームページ上でも見られるようになっていきますので、ご覧ください。アンケートの中で、「図書館でいつも何か展示しているのは嬉しい、ぜひ続けてください」との声もありますので、今後も内容を更新して図書館の資料を紹介する展示をしていきたいと思ひます。

展示コーナーについて

こちらは、本学学生、職員がカウンターに使用申込を出すことにより、無料で自由に作品を展示できるコーナーです。図書館に入ったらすぐのコーナーなので、図書館を訪れた人は誰でも目にすることがあると思ひます。美術教育講座の構成員に限らず、グループであるいは個人で絵画、写真、陶器、デザインや授業の課題作品などが展示され、力作揃いで目を楽ませてください。特定の時期だけでなく、年間を通しての利用があります。ホームページでも今週のギャラリーとして紹介していますのでご覧ください。



本学教員等著作寄贈図書一覧(平成17年1月~平成17年12月受贈分)

伊沢紘生(環境教育実践研究センター)

- ・野生ニホンザル・母系社会のオスの生活史/研究代表者伊沢紘生。-[伊沢紘生], 2005--(科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書;平成13年度-平成16年度)

太田直道(社会科教育講座)

- ・カントの人間哲学:反省的判断論の構造と展開/太田直道著。-晃洋書房, 2005

笠間賢二(学校教育講座)

- ・「小学校教育効績者選奨」(1905-1924)関係史料集/研究代表者笠間賢二。-[笠間賢二], 1990

坂本 幸(障害児教育講座)

- ・視覚的伝達方法で有効な相互交渉を持つための視線、注意、情報の調節方略の検討/研究代表者坂本幸。-[坂本幸], 2005--(科学研究費補助金基盤研究(C)(2)報告書;平成14年度-平成16年度)

田幡憲一(理科教育講座)

- ・蔵出し生物実験/田幡憲一, 猪狩嗣元, 降幡高志, 遺伝学普及会編。-裳華房, 2005--(遺伝:生物の科学;別冊no. 18)
- ・理科が得意な教員を育てる:教育実習を機軸とした教員養成の実践的研究/[研究代表者]田幡憲一。-[田幡憲一], 2005--(科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書;平成15年度-平成16年度)

田端輝彦(数学教育講座)

- ・算数・数学教育における比例的推論の役割について/研究代表者田端輝彦。-[田端輝彦], 2005

永田英治(理科教育講座)

- ・「粒子的物質観」にたつ実験教材の受容史、その教材としての今日的意味/研究代表者永田英治。-[永田英治], 2005--(科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書;平成14年度-平成16年度)

西林克彦(学校教育講座)

- ・できるように見える子どもたち:算数中間学力層の脆弱さに関する認知心理学的研究/研究代表者西林克彦。-[西林克彦], 2005--(科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書;平成15年度-平成16年度)
- ・自己学習力を育てるオープンエンドな授業構成に関する研究/研究代表者西林克彦。-[西林克彦], 2000--(科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書;平成10年度-平成11年度)
- ・わかったつもり:読解力がつかない本当の原因/西林克彦著。-光文社, 2005--(光文社新書;222)

見上一幸(環境教育実践研究センター)

- ・織毛虫ゾウリムシの有性生殖に不可欠な核アポトーシスの機構解析/研究代表者見上一幸。-[見上一幸], 2005--(科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書;平成15年度-平成16年度)

山田哲也(学校教育講座)

- ・学力の社会学:調査が示す学力の変化と学習の課題/苅谷剛彦, 志水宏吉編。-岩波書店, 2004

横須賀薫(学長)

- ・授業の深さをつくるもの/横須賀薫著。-教育出版, 1994

図書館企画展 歴史のなかの教科書～国語と修身～の報告

学校教育講座
田 端 健 人

昨年夏、本学附属図書館による教科書企画展が、7日間にわたって開催され(平成17年7月27日～8月2日)、好評のうちに幕を閉じた。この企画展は、新聞やラジオやテレビ・ニュースでも報道され、来場者は、総数で1,200名を超えた。開催時期がオープンキャンパスと重なったこともあって、来場者の内訳として最も多かったのは、高校生であり、次に本学の学生・教職員、さらに教育機関関係者、一般の方々、他大学の学生や教職員と続いた。会場となったのは、図書館内に新しく設けられたスペース「多目的閲覧室」(昨年6月にリフォームを終え利用可能となった)であったが、このスペースが幸先のよいデビューを飾れたことも、関係者にとっては喜びとなった。



舞台裏を少しだけ披露させていただくと、この企画展は「ローコスト」の「手作り」だったといえる。最もコストがかかったのは、新しく購入した数十本の卦算(けさん=展示品を押さえるガラス板)くらいだったのではないだろうか。数台の展示ケースを借り受けたが、こちらの交渉と先方のご好意で無料だった。さらに、宣伝用ポスターも、展示パネルや展示品のキャプションも、展示品の配列やディスプレイも、配布パンフレットも、ほとんどすべて本学の機材を活用しての、本学教職員の創意工夫と手作りであった。さしずめ、本学教員と事務職員及び図書館職員の“コラボレーション”というところであろうか。そのため、専門のアート・ディレクターに依頼したエクサヴィジョンのようなデザイン性や華々しさには欠けていたが、関係職員みんなで額に汗した充実感はひとしおであった。

来場者のアンケートからすると、最も印象深かったのは、「墨ぬり教科書」だったようである。

これは、周知のように、太平洋戦争直後のGHQによる指令のもと、軍国主義的イデオロギーを



(墨塗り教科書)

助長するとみなされた叙述を削除するために、教師の指示に従って、子どもたちが教科書の当該箇所を墨を塗ったり、切り取ったり、糊で貼り合せたものである。当時の子どもたちの心境へと思いを馳せた見学者も少なくなかったようである。次に反響が大きかったのは、見学者自身がかつて使った教科書である。子どもの頃使った教科書を手にすると、自分の子ども時代が蘇り嬉しくなった、という感想にうかがわれるように、教科書というのは、意外にも、子ども時代の自分と深く結びつき、ノスタルジーを誘うようである。この他、来場者たちは、江戸期の寺子屋で使われていた往来物や戦前の教科書の前でも立ち止まり、興味津々の様子で見入っていた。

本学図書館が所蔵する教科書は、宮城師範学校の蔵書を受け継いだこともあって、豊富であり、歴史的に貴重なものも含まれている。筆者も、研究書の解説や写真を介してこれまで聞き知っていた教科書の実物を、今回の企画展の準備中にはじめて目にし手にしたときには、興奮を禁じえなかった。「教科書はまさに時代の象徴物であることを深く感じた」という感想も寄せられたが、時代ごとに配列された教科書は、それぞれの時代やその変遷を、見る者に応じて様々に物語ってくれる。書庫に永らく眠っていた古い教科書たちが、改めて日の目を浴び、これだけ多くの人々の目に触れる機会を得、しかも、見る人々を多様に触発してくれたことは、なんと嬉しいことだろう。

図書館の展示企画



(実語教・童子教絵抄/小野篁歌字尽)



(田中義廉編輯:小学讀本)

所蔵する教科書の一部を、展示会という形である程度系統的に公開したのは、本学図書館としては、はじめての試みであった。今回は、修身と国語に限定し、江戸時代後期から今日にかけての300点あまりの教科書を展示した。今回の教科書展を弾みに、第二弾を企画しようという声もあがっている。



(柳田国語教科書の登場)

表紙の解説

スプリング・エフェメラルに寄せて

佐藤 秀二

早春に咲く花は、西欧では“スプリング・エフェメラル(Spring Ephemeral)”と呼ばれます。「春のはかない命」と言う意味です。元々「エフェメラル」とはカゲロウのことで、これが転じて、春にしか姿を見せない花や昆虫のことを指すようになったものです。この代表は、なんといってもカタクリ(片栗)でしょう。この字、見たことありませんか？そうです、あの「片栗粉」の片栗です。昔はカタクリの鱗茎(球根)から採ったそうだから、さぞかし沢山咲いていたのでしょうね。

そのカタクリが、宮教大の後方に広がる“青葉の森”のあちこちに群生しています。4月上旬に、花びらを精一杯反り返らせてうつむいている様子は、可憐な妖精のようです。しゃがんで下から花を覗いてください。右写真のように花卉にきれいなM字模様が見えますよ。でも、きれいだから

とって、花園に足を踏み入れてはいけませんよ。何しろ種が落ちてから開花まで、7～8年もかかり、踏み固められた地面からは、発芽しないのです。長い下積みの末に花開くカタクリは、速効性や効率化が求められる昨今忘れられた、日本人の美德を思い出させてくれるかもしれません。

(学務課教務係)



「マザー・グース」と「子どもの遊び」と「昔話」と ～オーピー夫妻の「仕事」を追って～

英語教育講座

藤 田 博



ピーター・オーピーとアイオナ・オーピー、オーピー夫妻の蔵書の一部、479点を「大型コレクション」として本学図書館が所蔵しています。その紹介を目的とする展示会を実施しました。タイトルは「イギリス児童書コレクションを引き寄せる——オーピー夫妻の「仕事」——」です。付け足しとしてレクチャーも行いました。オーピー夫妻の仕事を「マザー・グース(ナーサリー・ライム)」、「子どもの遊び」、「昔話」の三つに分けた展示に合わせて、その順にレクチャーを行ったこととなります。

これら三つに共通するものの第一は、「もう一つの世界」ということです。日常世界の向こう側につくられる非日常世界、日常世界の常識が通用しないそこへ入るには「切符」が必要です。切符とは、子どもの心を持っていること、それを持ってさえいれば年齢は関係ありません。それでは、切符の中身、「子どもの心」とは何でしょうか。常識にとらわれないものの見方のできることです。マザー・グースにあっては、当たり前のように牛が月を飛び越えていきます。ジャックとジルは「山の上へ」と水を汲みにいきます。追う者が追われる者へと反転する追いかけごっこ、そして逆立ちは遊びの世界を象徴するもの。親指ほどしかないトムは大きな相手をやっつける、なまけもののジャックはなまけものであるが故に幸運を得る、それが昔話の世界です。見えているのはあべこべであり、さかさまです。そこに何故という問いかけ、大人の常識は不要です。それにこだわる人はセンスを否定するノンセンスの

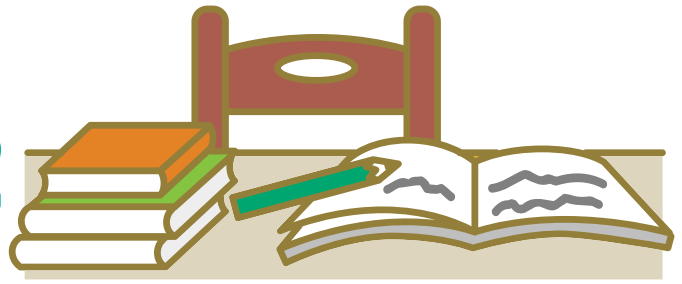
世界へは入れてもらえないのです。

もう一つの共通点は、これらすべてが無用であることです。マザー・グースなど知らなくても、その日の暮らしに困ることはありません。だからといってマザー・グースを削り、遊びを削り、昔話を削ってしまったらどうでしょうか。効率といった物差しからは外れていることを理由に、排除され、切り捨てられるとしたら、こちらの世界が灰色づくめになってしまうのは見えています。それは何をもって豊かか考えるかを問うことにつながっています。経済的豊かさが大事なものは言うまでもないとして、それだけでいいのかを問い掛ける姿勢とです。

三つ目は、それらがいずれも国の違いを越えていることです。マザー・グースにそのまま当てはまるものを探するのは難しいとしても、わらべ歌であれば共通部分は容易に見つかります。遊びや昔話の共通性は驚くほど、真似をしたのではないかと思えるほどによく似たものを世界中に見つけることができます。それに驚く心からは、相手に対する親しみが、尊敬が生まれます。上滑りしがちな国際理解や世界平和といった掛け声より、はるかに意味があるということです。

三つの共通点を持つ三つの世界に自在に出入りのできたオーピー夫妻は、二人そろって子どもの心を持っていたと言えます。似た心を持っていたから夫婦となったのか、夫婦であったから似たものになったのかはともかく、夫婦であることによって、三つの世界へと向かう思いが増幅されたのは想像に難くありません。のめり込む、そこに理屈は無用です。同時にそれを研究対象とし、仕事とするには突き放して見る大人の目が必要です。常識というこちら側の世界を大事なものとしながら、それでいて、あるいはそれだからこそノンセンスという向こう側の世界に遊ぶことができる、バランス感覚豊かなイギリス人がいることとなります。二人にとって三つのものは仕事です。それでいて最上の遊びでもあった。タイトルを仕事ではなく「仕事」とした理由です。

第4回 学生の読書室 ～私が選ぶこの一冊～



教 育

『学校って何だろう』

(刈谷剛彦 著, 講談社, 1998年)

4年:坂 田 智

「どうして学校に行かなければならないのか。」「どうして勉強しなければならぬのか。」このような疑問は、おそらく誰もが一度は感じたことがあるだろう。しかし、この疑問の答えを導き出せる人はそういない。将来、教壇に立ったときに子どもからこの疑問を投げかけられたら、答えに詰まってしまわずである。

この本を読めば、先の疑問が解決するわけではない。

しかし、これを読めば今までとは違った視点で学校というものをみることが出来る。疑問の答えは、数学の計算のようにひとつではないと思う。さまざまな答えを考え出し、その中から自分の納得いく答えを探すために、学校をいろいろな角度からみていく必要があるだろう。そんなときにこの本が役立つはずである。文中には読者も一緒に考えさせるような投げかけが見られる。そこでは、一度本を置き、自分のなかでその答えを探してみよう。そうしているうちに、学校に対する「常識」に囚われることなく学校について考えることができるだろう。

『いのちの教科書』

(金森俊朗 著, 角川書店, 2003年)

4年:泉 翔 子

この本は、金森先生が学級で実践した授業について記したものです。そこには、「いのちって何だろう?」と考えさせてくれる授業場面が盛り沢山。新しい生を授かった妊婦を実際に招いたり、死を間近にしたがん患者などに授業をしていたりすることもあります。命を学ぶには生と死の両方を大事にしたいと考えている金森先生。漢字一つで命の授業を行ってしまう先生の教師力にも感銘を受けるでしょう。教師を目指す人にとっては必見の図書ですね。子どもたちの真剣に考えた言葉も大変心に響くものがあります。命の授業の中で、ある児童が心の奥にあった辛さや寂しさを涙ながらにみんなに語る場面も感動的。「生きることの大変さ、人間のどろどろした心の部分」も感じると同時に、「人が人として生きていく、人と共に生きる、そんなあたたかさ」も感じます。何より推薦する理由は、読みやすい!子どもの様子が目に浮かぶように描かれており、金森先生の考えも読者に明確に記されています。本が苦手と思う人も簡単に読めてしまいますよ。

「いのちって何だろう?」金森先生や子どもたちと一緒に考えてみませんか?

『いのちの教科書』

(金森俊朗 著, 角川書店, 2003年)

3年:高 橋 里 枝

私はこの本から、「いのちとは、人とのつながりの上で成り立つものだ」ということを学んだ。

人間は何をするにも、目標を達成しようという真剣さややる気をもてば、自分の可能性を何倍にも伸ばすことができる。全ては気持ち次第だ。しかし、子どもたちの中には、自分への動機づけができないという人たちが多く。それは「生きる実感」がもちにくいからではないか。自分の人生なのに、何をしたらよいか分からない、始める前から可能性は決まっている、と考えてしまう。それは子どもだけでなく大人も抱え得る問題だ。

それに対して金森先生やここに描かれている子どもたちは、真剣に「生」と「死」に向き合い、そして仲間たちとみんなでハッピーになることを目指している。そこには決して励ましだけではなく、今を漠然と生きる私たちの甘えを厳しく突いたものでもある。しかし、この本を読むことで、私たち自身も生とは何か死とは何か、そして仲間を信じることはいかに大切かという

🔍 今話題の本 🗣️

『ダ・ヴィンチ・コード』

(ダン・ブラウン 著, 越前敏弥 訳, 角川書店, 2004年)

この本は、ルーブル美術館館長ソニエールの死体の周りに残されたダイニングメッセージから、ハーヴァード大学教授ラングドンと暗号解読官であり館長の孫娘でもあるソフィーがその謎を解いていく物語である。その過程において、ダ・ヴィンチの「フィボナッチ数列」や「ア

ナグラム」などの多くの功績がからんだ謎解きがあり、ダ・ヴィンチの才知に感動してしまう。また、この本に書かれている芸術作品・建築物・文書・秘密儀式に関する記述は、すべて事実に基づいている。そして、この本の最後には、ダ・ヴィンチが描いた絵画「最後の晩餐」に長年隠されてきた事実が明らかにされる。フィクションとノンフィクションの入り交じるこの本は、最後まで読者の心を興奮させ、強い臨場感を与えてくれる本である。



生きる♡

『ハッピーバースデー』

(青木和雄・吉富多美 著, 金の星社, 2005年)

3年:大 森 早矢香

「おまえ、生まれてこなきゃよかったよな。」と、衝撃的な一言から始まるこの物語。主人公あすかは兄直人からも両親からも愛されていない。母静代からは存在を否定され、直人はあすかをからかった。そんな日々の中、苦しいことがあると自分の咽喉をつまむようになったあすかは、声がでなくなってしまう。咽喉をつまむということがあすかにとって助けを求めるサインだったのに、誰も気づくことができなかった。声が出なくなって初め

て先生があすかの異変に気づく。直人はそんなあすかの姿を見て、今までの自分の行為を反省し、あすかの味方となる。

そして、あすかは母方の祖父母の家に預けられ、心の治療をしていく。自然に触れ、優しい祖父母に守られながら、あすかは強く成長していく。母の幼少期の秘密や養護学校でのめぐみとの出会い、クラスでのいじめ、めぐみと祖父の死。さまざまな体験を通してあすかは「生まれてきたことの意味」を考える。

教師と生徒、母と娘、家族のつながり、生と死、人間の強さと弱さ。人として大切なことを考えさせられる一冊です。

『やさしさの精神病理』

(大平 健 著, 岩波書店, 1995年)

一読書人

「席をゆずらない」やさしさ、「黙りこんで返事をしない」やさしさ…若い世代を中心に、独特の新しい“やさしさ”が横行している。本書では、その“やさしさ”の特徴や問題点などを、精神科医である筆者が相談を受けた患者の事例から分析する。年配の世代から見れば失礼で理解の範囲を超える彼らの“やさしさ”であるが、そんな“やさしい”人間であるからこそ抱える悩みや心の闇が次第に見えてくる。教師として若い世代の“やさしさ”とどう向き合っていくべきなのか、その奥にある子どもたちの葛藤にどう目を向けていくべきか、それを考えさせてくれる一冊である。

『ローマ人の物語』

(塩野七生 著, 新潮社, 1992~2005年)

大学院:鈴木直子

実のところ、この本に関して「…この一冊」というのは正確ではない。2005年12月に発行された最新刊『キリストの勝利』を含め単行本で14冊に亘る大長編である。

私たちはなぜ歴史を学ぶのだろうか? 『ローマ人の物語2 ローマは一日にして成らず[下]』(文庫本)の「ひとまずの結び」の中にこのような一節がある。「…古代のローマ人が後世の人々に遺した真の遺産とは、広大な帝国でもなく、二千年経ってもまだ立っている遺跡でもなく、宗教が異なるうと人種や肌の色がちがおうと同化してしまった、彼らの開放性ではなかったか。」さて、二千年後現代を生きる我々はどうだろう。

時と処を隔てた過去に存在した人々の日々の営みの膨大な集積である歴史を学ぶことの意義とは「我々は何者か」を知り、「我々はどこへ行くのか」を探るところにあるのではないだろうか。「未来」について知りたい人、この本で「過去」へと旅することをお勧めする。

『母よ嘆くなかれ(新訳版)』

(パール・バック 著, 伊藤隆二 訳, 法政大学出版局, 1993年)

4年:管 野 華 奈

この本は、ノーベル文学賞を受賞したパール・バックが知的障害を抱える娘との体験を綴ったものである。この本を読むと、障害について考えさせられるとともに、どんなことにも負けず、強く生きようという希望が湧いてくる。「諦めとは停滞であり、死を意味します。消極的に受け入れることでは、そこからは何も生まれません。」さらに、一人の母として同じ苦しみを持つ母親に対して、本の中から励ましを送っている。「あなたは今はわからないかもしれませんが、あなたのお子さんの存在の目的を果たし、お子さんと共に生きる間に、必ず本当の喜びを見出すことになるのです。さあ、頭を上げて、示された道を歩んでいきましょう。」私はこの本と出会った頃、挫折を味わっていた。しかし、パール・バックさんとお茶を飲みながら直接対話しているような気持ちになり、私の中に元気が湧いてきた。短くて平易な文章で書かれているが、読んだ人に生きる希望を与える本だと思う。

『シャネル 二〇世紀のスタイル』

(秦早穂子 著, 文化出版局, 1990年)

2年:杉 本 さやか

ふと、手にした本だったが、一気に読んでしまった。この本はぜひ、女性の方に読んでもらいたい。

なぜかという、「シャネルのように生き、シャネルのように死にたい。」と思えるほど、刺激的だったからである。現代、女性の地位の向上が見られるが、完全ではない。まだ、男性に頼り、生きていくことが一般的である。シャネルは女性が自力のみで生きていくことへの先駆けである。

本書の中でシャネルは生き生きと書かれている。古い身分制がまだ残る社会の中で、底辺から這い上がるシャネル。多くの男性と付き合っていく中で、彼らからたくさんのものを得る。シャネルは彼らと結婚を望むが、結局一生独身である。そこがまた、魅力的だ。シャネルは、付き合ってきた数多くの男性達を足場にして、現代まで名が残るブランドを作ったのだ。私は後世まで名の残る人になりたいとは思わない。ただ、シャネルのように他の人に影響を与え、死後も人の心の中で生き続けるようなそんな人になりたい。



『都立桃耳高校神様おねがい！篇』
『都立桃耳高校放課後ハードロック！篇』
(群ようこ 著, 新潮文庫, 2000年)

大学院: 渡 辺 曜 平

大学に入った人ならほとんどの人が体験している高校時代。いまから考えると相当くだらないことで一日つぶしたり、そうかと思えば、いまから考えてもシリアスな問題に直面せざるを得なかったりした、不思議な期間。何を考えて生きてたんだか知らないが、そのときは何かを必死に考えていたんだと思うと、「いやぁ、良いやつだったんだなぁ」なんて意味もわからず過去の自分に感心

したり、しないか。

主人公のタヤマシゲミも高校生。シゲミが通っていた都立桃耳高校では、毎日のように地味な事件が繰り広げられる。傷つくこともあるけれど、基本的にみんな元気。爆笑のために涙なくしては読めない、群ようこの自伝的小説。

グランドファンクもジミヘンも出てくるけど、そんなの知らなくたって全然大丈夫。どこかに自分を見つけることができるはず。高校時代が懐かしくなり始めた大学生が読むべき本です。読みながら数年前の自分を思い出して、「良いやつだったんだなぁ」と感心してください。

くらしを考える 

『路上観察学入門』

(赤瀬川原平・藤森照信・南伸坊 編, ちくま文庫, 1993年)

3年: 小笠原 由紀子

とにかく、この本を読んだ後にはきっと、路上のさまざまなものが面白すぎて街をスタスタ早歩き出来なくなっているに違いありません。

路上を歩くのは、大抵ある地点からある地点への移動のときで、目的地以外のものには用ナシです。でもそ

の用ナシのものに目を向けたとき、世の中の広がりを見つけた喜び、それが路上観察だととらえていました。が、どうもそれだけではないようだ、この本を読むと思えます。

個人の側から生まれた表現である芸術からずれて自己表現が消滅して、紙の上の学問からずれて現実へ。誰かが意図して(うけようとして)造ったものを鑑賞するのではなく、意図からずれたところを観察するのです。誰の為でもなく、何かの為でもない。そんな路上観察、とてつもなく広がっているようです。

『みんなと考える人間と地球の健康』

①『食事がつくる人間のからだ』

(戸塚績 ほか 著, 星の環会, 1989年)

4年: 城 内 恵 美

現代の子どもたちに、食物と地球環境の関わりや、食事の大切さを知ってほしいという方に、この本をお勧めします。私がこの本を勧める理由は、2つあります。1つ目に、見開き1ページごとに1つの内容が書かれている点です。それぞれにはサブタイトルが付いているので、興味のあるタイトルを選んで読むことができます。2つ目に、内容の1つひとつが絵を交えて説明されていることです。活字だけでは良く分からないことも、絵によって理解しやすくなっています。

次に、この本の内容を簡単に紹介します。この本は、

全部で30の項目から構成されています。例えば、第9項目では子どもたちの味覚が鈍ってきていることについて、第19項目では現代の子どものアレルギーやアトピーについて説明されています。このように、子どもを中心として書かれているので、子どもたちは身近な問題として捉えることができます。さらに、肥満や便秘などに対するアドバイスや、かむことの大切さにも触れており、「食事は人間をつくる」ということを実感することができます。

この本は、「みんなと考える人間と地球の健康」全6巻のうちの第一巻です。初版は1989年に、星の環会から発行されました。大学教授の戸塚績さんや、医師の真弓定夫さんら13人の方が執筆しています。イラストは、藤山さつきさんと関孝行さんです。10歳以上を対象としており、大人が読んででも十分勉強になる本です。

【原稿大募集】

ここは学生の皆さんが最近読んだ本、印象が強かった本、お勧めの本などについて自由に選んでいただき紹介してもらおうコーナーです。今のところ図書のみとし、雑誌は除外しています。たくさんの原稿が集まりました。ありがとうございました。

いただいた原稿を編集委員会で選定し掲載させて頂きました。

今後もこの企画を継続していきますので、皆さんからの投稿をお待ちしています。

ここに紹介する本は図書館入り口の書架に「学生の読書室」として配架しています。

次号発行は夏の予定です。

名前、所属、学年、連絡先と、紹介する本の書名、著者名、出版社を記入の上、400字以内で、図書館カウンターにフロッピーディスクまたは下記アドレスへお送り下さい。

ご希望があれば氏名のイニシャルのみの表示にしますが、初めからの匿名は受付しません。

尚、「こもれび」の記事は図書館のホームページでも公開されます。

seiri@staff.miyakyo-u.ac.jp (菅原)

図書館に所蔵していない図書については、学生希望図書として図書館に購入希望を出していただくことも



新任教員からひとこと：『私と図書館』

『図書カード』が語るもの

井 柳 美 紀

図書館の思い出は数知れない。なにしろ教室よりは図書館こそが私の勉強の場であり、娯楽の場でもあったからだ。ただし、以下に書くのは、図書館であるより、むしろ「図書カード」にまつわる思い出である。

まずは、高校時代から。高校時代の図書室は小さかったが、よく利用した。たしか司書の方が一人だけいて、彼(彼女?)の記憶はほとんどないが、一つだけ鮮明な記憶がある。その司書は「図書カード」を卒業時に「思い出に」、と言って生徒一人一人に手渡してくれたのである。カードには次のようなメッセージも添えられていた。「卒業おめでとうございます。巣だちの日にあなたの在校中の読書の記録を心をこめて贈ります」。そして、この「図書カード」とは、各人が本を借りる時に本の題名を書き込むためのものであった。私はいまでもこれを大事にとっている。私のカードには、『政治家になるには』、『政治学への道案内』、『国会』、『歴史の中の憲法』、『個室の中のロシア人』、『国際協力専門家になるには』、『歌舞伎十八番集』、『能の物語』、『日本の詩歌』、『キュリー夫人伝』などといった題名が並んでいる。いまカードを見るのは、少々気恥ずかしさを伴うのだが、「政治学を勉強しよう!」と思った当時の10代らしい心意気を懐かしく回想させられもする。

次に、大学時代から。少し「図書カード」の話から脱線する。しかし、大学時代の図書館の話は外せない。この時期は大学の図書館でバイトをやっていた。窓口業務から、受け入れ雑誌の整理、本の修理など何でも手がけたが、何より嬉しかったことは先生や院生たちがどのような本を読んでいるのかを知り得たことである。そうして私の本の世界は広がった。あるいは、利用学生の質問に答えるうちに資料調査の方法も覚えた。一方、利用者としても図書館に入り浸った。

勉強をしていると、職員たちのおやつの時間によく誘われ、ケーキなどを頂いては、食べ終わるとまた勉強へと戻った。いまでも、この時の職員の方々とは交流がある。小規模大学の図書館ならではのアット・ホームな雰囲気がそこにはあった。

最後に、大学院時代から。大学院は大規模大学で、図書館も、総合図書館、各学部図書館、各研究所図書館などがあったが、私の場合、大抵は法学部図書室で用が足りる。法学部図書室の蔵書数六十万冊以上に対して、利用者は教員と院生だけなのだから、今思うと贅沢な環境だった。しかも、本の貸し出し冊数も、貸し出し期間も、事実上、無制限である。そして、この図書室の貸し出しには「図書カード」が用いられた。本の裏表紙を開いたところに封筒で作られた小さなポストがあり、そのなかにカードがある。カードに自分の名前を記して本を借りる。つまり、カードに書かれているのは、いままでその本を借りた人たちの名前の一覧である。福田歓一、佐々木毅、三谷太一郎、そういった高名な政治学者の名前の並んでいるのを見ては「ここに私の名前を書いても良いのだろうか?」としばしば躊躇し、あるいは友人や先輩の名前を見つけては「ああ、あの人もこの本を読んだのか、私も読まねば!」、「この本をまだあの人たちは読んでいないのかしら?」などと考える。ゆえに「図書カード」を見ることはちょっとした楽しみだった。

いまや図書館のカード化は進み、個人情報管理は厳格になり、もはや「図書カード」などは古めかしいかもしれない。しかし、そのような古めかしい習慣もなかなかのものだった。以上が、図書館にまつわる私の思い出のほんの一部である。

(社会科教育講座)

新任教員からひとこと：『私と図書館』

自然誌系博物館と図書館

島野 智之

図書館の書架に向かっている時の私は、森の中に佇んでいる時と同じである。ときどき、落ち葉の下の動物たちと話を始めるように、また、書架にならんだ本の著者と話を始める。ときに、森の妖精が目の前をゆきすぎるように、また書架に佇む著者達との会話を楽しむ。福島の会津地方には、ミカン箱いっぱいの古本で、森の一坪の土地と交換してくれる場所があるという。「本の森」という名前の書店がどこかにあったが、森の全ての木々は同じように見えて、それぞれの木々はそれぞれの歴史を持っている。図書館に並んだ本も、眺めているならただの書棚だが、ゆっくり手にとってそれぞれの本と会話をすれば、どれほど様々なことを語り合えるのだろう。僕にとって森の中で過ごす木々たちとのゆったりとした語らいの時間は、図書館で過ごすゆったりとした本たちとの語らいの時間とよく似ている。

私の専門は博物学(自然系)である。博物館と聞いて、この文章を読んでいる人は、どう思うのだろうか。日本の自然誌系博物館は、展示をするところと、多くの人が思っているかもしれない。しかし、博物館は図書館と同様に開架もあれば、閉架もあるのだ。実際のところ、ヨーロッパの自然誌系博物館は閉架のところが多いという。有名な自然誌系博物館と聞いて、ワクワクしてそこについてみても、古臭いなんの親切さもない建物があるだけというのが、そういったヨーロッパの自然誌系博物館の姿である。もちろん大英自然誌博物館の展示室など、多くの貴重で価値のある展示を持っている博物館がある。しかし、大英自然誌博物館は、当然ながら閉架の部分にも無双の価値がある。さて、その何の面白みもない自然誌系博物館には、いったい何があるのかというと、きちんと管理された生物の標本が、その閉架資料室にある。研究のために籠もろうとすると、食堂さえもなく弁当を持参しなければならないことも屡々である。しかし、気の利いた食堂や楽しい博物館ショップはなく

ても、貴重な生物標本だけは丁寧に管理してくれている。それでは、なぜ生物標本が大切か。その例の一つとして、日本の開国時代は、国内の昆虫の標本などはオランダなどに持ち出され、これに基づき、リンネ式の命名法によって学名がつけられた。リンネ式の命名法は、その新種の命名のためには、ホロタイプ(正基準標本)とパラタイプ(副基準標本)という「もっともその種の特徴を現している」と新種記載者が考えた標本群(タイプシリーズ)を残すことになっている。この標本は、将来、この種と別の種の種分類学的研究のためには欠かせないものとなる。また、時に、このタイプシリーズと呼ばれる標本群が2種に分けられることもある。つまり、当時の分類学者が気づいていなかった部分が後年に発見されることがあるのだ。そのような理由から、日本で動物分類学をすすめるためには、ヨーロッパの自然誌系博物館の所蔵している標本の閲覧はどうしても欠かせないし、また、図書館に所蔵された当時の新種記載の論文そのものが、絶対に必要となる。このように本来、博物館とは図書館と同じように、閉架の標本管理施設としての役割が大変に大きい。もちろん、博物館と同様に図書館における本の分類は、大変重要な分類学のひとつの分野であることは言及するまでのこともない。

2006年の現在、私の研究上のライバルは同時代の研究者であるが、また同時に、会ったこともない1800年代や1700年代の先駆者たちがライバルでもある。博物館のところで書かせていただいたが、生物学者のうち分類学者だけは、古い文献を全て知らなければ研究ができない。そのようなわけで、図書館は僕にとっては絶対に必要な研究上の拠り所でもあり、またそう思えば「語らいの時間」とは異にした図書館は、私にとって華やかで刺激的なミュージカルや映画を見に行く以上の楽しい劇場となる。

(環境教育実践研究センター)

新任教員からひとこと：『私と図書館』

現実との対話の機会が奪われた「私」と「図書館」との絆

松崎 丈

小・中学校時代の図書室は、紛れもなく私の精神的な孤独を癒し、ファンタジーや虚構などの世界から生きる意味を追求する姿勢を励ましてくれる場所であった。

灰谷健次郎が青年期の孤独と葛藤を著した長編の「我利馬の船出」、スポーツ、恋愛、家族との関係で揺れ動く青年の青春を爽やかに書いた高橋三千綱の「九月の空」、白樺派の代表的な存在だった武者小路実篤が二人の青年の友情や愛憎劇を写實的に描いた「友情」と「愛と死」、ある大学生のアイデンティティを妙に印象に残る語りで書いた三田誠広の「僕って何」など。

いつも満たされることのない精神の泉をこれでもかと潤すように数多くの小説・物語を読み漁った。授業の合間や昼休みなど5分でも自由な時間があれば、すぐ図書室へ向かい、天井まで届きそうなほどに高い本棚が少しの埃をかぶってこんもりと並び、窓際に点在する木製の古椅子に座ってファンタジーや虚構の世界に浸っていたものである。誰かが図書室に入って来ようと私の近くを歩いていようと、本に読みふけている私には遠い遠い世界の出来事のように感じていた。ふと気づけば休み時間がもう終わったりする。こんな私を、他人から見れば文学青年だなと思うだろう。

私が読んできた図書に共通するキーワードは、青年期・自己喪失・対話・存在意味の探求の四点である。これは当時の私にとって切実なテーマだった。生まれつき重度の聴覚障害のある私は、小学校から高等学校まで通常の学校に通っていた。小学三年から六年間、級友からの差別やいじめ、教師の心無い対応に苛まされた。自分の悩みを語る親友はおらず、他愛のない会話の相手さえもいなかった。学校の会議やHR、級友の会話を目前しても、きこえない私には「そこで何がどのように起きているのか、その結果どのようなことがわかったのか」が全く見えない。きこえない私がこの世界に生きる意味は何だろうと考えたくとも、私の中に

対話する相手がいなかった。そうした状況で唯一対話の相手になってくれたのが、図書室に蔵書された本たちである。本は、現実の世界ではきこえないがゆえに知ることができない物事を様々と教えてくれた。主人公が何かの出来事で自己喪失し、登場人物や自分自身との対話を重ねながら紆余曲折するうちにアイデンティティを徐々に確立していく過程は、私に自分の存在意味やそれを考えることの意義・必要性について示唆してくれるものだった。また、私が主人公に投影することで、現実世界での苦悩や絶望から解放され、本の中で他者や集団との対話を仮想体験したり、再度現実世界を見直そうとした。様々な本との対話が、現実の人々との対話ができない私が孤独に耐えながらも時々刻々前向きに生きる意味を考えていくように支えてくれたのである。

中学三年。私はようやく一大決心し、学校行事の弁論大会で級友や教師にきこえない自分の経験や思いを正直に打ち明け、きこえない者が聴者多数社会で生きることを意味を問うた。その時から、私と現実世界との関係が大きく変わった。級友や教師が、現実世界で起きている様々な事柄を時には面白く伝えたり、会話や話し合いの内容を簡単ながら説明するなど配慮してくれるようになった。それに私も癒され、自ら本との対話で知った様々な事柄を現実世界で実践に移そうとした。やがて自分の孤独さを癒すために図書室へ足を運ぶ機会は徐々に減っていった。

以後、私と「図書館」の関係はもはや別物になりかわった。現実の人々との対話で見聞きしたことや自分の世界を深めるために「図書館」に行くようになった。きこえない子どもも、聴児と同様に「図書館」とは本来そういう関係から始まってほしいと心から切実に願う。

(障害児教育講座)

新任教員からひとこと：『私と図書館』

変貌する大学図書館

石澤 公明

図書館の存在を意識し始めたのは、大学入学後の事であった。川内にあった東北大学教養部の教室の多くは、アメリカ占領軍が残っていた木造家屋を利用していた。教養部図書館もその例外ではなかった。生物学の講義で参考資料として配られた、Scientific American(現在日経サイエンスがその一部の記事を日本語に訳して出版している)から選ばれた英語論文の別刷りは、生物学を学ぶことを志していた私にとって、その知識欲を満たしてくれる新鮮な教材であった。これら論文には、NatureやScienceなど一流科学雑誌の論文が、参考文献として挙げられていた。お世辞にも立派とはいえない教養部図書館に、これらの雑誌があることを知った私は、それを読んでみようと思った。受付でその雑誌の年号と巻数を申し出ると、奥の書庫から出してもらえた。それをその場で読み、その内容を理解するほどの、生物学の知識と英語力を持ち合わせていなかったことは想像に難くない。仕方なくその英文をノートに書き写そうと努力したことが、かすかな思い出として残っているだけである。当時、コピー機というものがまだ普及していなかったのだ。

大学院の学生になった頃、私にとって大学の図書館はなくてはならないものとなっていた。在籍していた理学部生物学科の図書室は、何時でも必要な論文や単行本をコピーすることが出来た。雑誌については、学内外の所在を簡単に調べられる小冊子があり、申し込めばコピーが得られるようになっていた。ある日、文献検索システムというものがあり、将来大学の図書館には導入されるらしいとの話を耳にした。しかし、パーソナルコンピュータが普及する以前のこと、それが導入されるとどのような恩恵があるか想像することなどできなかった。そのような文献検索システムを体験したのは、それから大分たってからのことである。今ではおもちゃ

同然の8ビットのパソコンを買い、これに音響カプラーなるものを介して電話線に接続した。アメリカ本土にあるBIOSISのデータベースから、キーワードにより検索された論文リストが、オンラインで送られてきた。これにはお金が掛かった。データベース接続料に加え、伝送速度が遅いので電話代が馬鹿にならない。とてもゆっくり検索などする気分にはなれない代物であった。やはり、図書館で雑誌に目を通し、またCurrent Contentsのキーワードを一つ一つ引く作業が続くことになった。

このような図書館との付き合いに著しい変化が現れたのは、各研究室のパソコンがネットで結ばれ、そして雑誌のオンライン化が普及してからである。文献検索にも、強力なシステムが使えるようになり、今や自分の机に必要な文献がプリントできる時代を迎えた。実は、このシステム全体を維持するためには、多額の費用を必要とすることを本学に赴任して知った。本学のような規模で、多くの専門分野が集まる機関では、それら全ての専門分野を網羅するシステムを支えることは、現状では難しいことを知ったのである。しかし、将来の日本の教育を担う教員となる学生諸君に、このような情報システムを充分に利用できる、より良い環境を整えたいものである。

この数十年の歩みの中で、私と大学の図書館との関係は大きく変化してきたことになる。しかし、図書館で実際に本を取って、一枚一枚ページをめくり、自分の目で情報を取捨選択することは、これから勉強を始める初学者にとっては、興味を広げ、思索を深める極めて重要な過程であることを見落としてはならない。この意味からも、大学図書館の役割は大きく、その拡充に努力しなければならないと考えている。

(理科教育講座)

平成17年度漢籍整理長期研修に参加して

情報サービス係 五十嵐 幸子

「平成17年度漢籍整理長期研修」受講について簡単に報告いたします。講習は前期(6月20日～24日)と後期(9月5日～9日)に分かれ、前・後期の間の2ヶ月余りの期間は前期の講義をもとに所属機関図書館で自習という日程で、会場は主催の東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センターです。全国各地から集まった受講者は私を含めて10名。9名が大学図書館員、1名が県歴史資料館の学芸員でした。講義は「漢籍版本目録概説」に始まり、目録の実際を、「整理実習」で、ほかに「四部分類」「朝鮮本について」「和刻本について」、「漢字をめぐる電腦環境について」「漢籍データベースの利用と構築」「漢籍補修法」など多岐にわたりました。このほかに「東洋学研究所図書室」と「東洋文庫」の見学が組まれており、東洋文庫ではこの機会が無ければ見ることは無かつたろうと思われる貴重な資料を、半日かけて多数見せていただきました。その一部は、見学の際に頂いた解説本『世界のなかの江戸・日本：(財)東洋文庫のコレクションを中心に／東京都江戸東京博物館編』(請求記号：大210.5||ト||8)に掲載の写真で見ることができます。受入手続きして1階の大型本コーナーに置いてありますので、皆様も一度手にとってご覧下さい。

初めて触れた漢籍の世界はとても興味深く、久しぶりに新しい知識を得るときのワクワク感を覚えました。「漢籍補修法」では宮内庁書陵部技官の方が2名講師となり、目の前で鮮やかにぼろぼろの虫喰い本を修理して見せてくださいました。紙縫りづくりや、和綴じの実習など、例え一度きりでも、体験しなければ分から

ない事も多くありました。前期に出された宿題に呆然とし、7月8月はずっと頭の片隅を占めている宿題のプレッシャーで胃の痛む思いをしたこと、それでも少ない工具書と格闘しながら何とか宿題を完成し、後期に発表を終えた時の安堵感など、今となれば楽しく思い出されます。

ふり返って宮城教育大学附属図書館を見ると、所蔵している漢籍は約300点。『十三経注疏』のような経注疏合刻類や叢書を1点と数えての数であり、分量にするとかなりの量です。その殆どが整理され、冊子体目録である「宮城教育大学所蔵和漢所古典目録(正)(続)(拾遺)」の『漢籍の部』に収録されています。しかし、OPACへの登録がされていないため、検索の手立てが前記の冊子体目録のみであり、かつ索引は書名の五十音順索引のみとなっているため、四部分類、書名の正確な読みなどの知識がないと、所蔵の確認すら難しいです。図書館職員としてサービスを提供するためには、ある程度基本的な漢籍についての知識が必要ですが、通常の図書館業務のなかだけではそれを獲得できない現状のなか、今回「漢籍整理長期研修」を受講させて頂き、漢籍に対する体系的な知識を得ることができたことは、大変有難く、貴重な経験でした。今後取り組むべき課題は所蔵漢籍の目録オンライン化でしょう。

最後に、受講の機会を与えてくださった図書館長、事務長、忙しいなか気持ち良く送り出してくださり、留守中の仕事を引き受けてくださったスタッフの皆様にご感謝申し上げます。ありがとうございました。

救命講習を受講して

図書館利用者がショック等で倒れたら?! そのような場合に適切に対応できるよう、仙台市消防局の救命サポートセンターにおいて、図書館職員全員が救命講習を受講しました。

講習会では、応急手当に必要な基礎知識から人工呼吸や心臓マッサージ、AED(自動体外式除細動器)の使用方法など、救急車が到着するまでのわずかな時間に行える応急処置の技能を習得し、改めてその重要性を認識しました。今後も安全に対する意識を高めるため、定期的に講習会を受講するなど利用者サービスに努めたいと考えています。(櫻井)

その他研修受講状況

目録情報係 三浦 純子

平成17年度
漢籍担当職員講習会(初級)

平成17年10月3日(月)～10月7日(金)

於：京都大学人文科学研究所

附属漢字情報研究センター

平成17年度
NAIST電子図書館学講座

平成17年11月30日(水)～12月1日(木)

於：奈良先端科学技術大学院大学

編集 後記

新入生の皆さん、こんにちは！大学図書館はこれまでの小、中、高校の図書館とはちょっと違います。大げさに言ってしまうと、どのくらい積極的に利用するかで自分の将来にも大きく関わってくるほどです。皆さんの役に立つことを待っている情報が、沢山埋もれています。

図書館職員はそれを引き出すお手伝いを致します。「図書館に行こう！」

平成18年度開館カレンダー

4月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

10月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

5月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

11月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

6月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

12月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

7月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

19年1月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

8月

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

2月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28			

9月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

3月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

- 通常開館** 月曜日～金曜日 9:00～21:30
- 土・日開館** 土曜日・日曜日 10:00～17:00
- 休業期間中** 月曜日～金曜日 9:00～17:00
- 休館日** 国民の祝日・本学創立記念日・年末年始・本学学位記授与式当

注1:平成19年1月20日～21日は大学入試センター試験のため休館します。
 注2:その他の臨時休館または開館時間を変更する場合は、その都度掲示等によりお知らせします。